

04-38

パースセンターの取り組みと今後の課題

那須赤十字病院 看護部

○山田 陽子、渡邊 悦子、舟川 令子、根本 美帆子、
福平 裕子、伊藤 歩美

【はじめに】当院では平成24年7月新病院開設と共に産科病棟内にパースセンターを併設した。その後平成26年4月より看護単位を産科病棟から独立させ新たな取り組みを開始したのでここに報告する。

【開設後の経過】平成19年4月助産師外来開設、平成23年8月より助産師主導の分娩を一部で始動した。平成24年7月新病院開設に伴い産科病棟内にパースセンターを併設した。パースセンター開設後の分娩件数は平均3件/月であった。当院は3次救急病院のため母体搬送やハイリスクに妊婦も多く、それらの入院中の妊産婦のケアと並行してパースセンターの分娩も行っている体制であった。このような環境の中で助産師達は、もっと産婦に寄り添いたい、妊産婦のニーズに併せて産婦が主体的に出産に取り組めるような支援がしたいという希望があった。そのため平成26年4月からパースセンターの看護単位を産科病棟から独立させた。独立後のパースセンターでの分娩件数は平成26年4月は7件であり、5月以降の分娩予約者数は約15名となっている。産婦達からパースセンターでの分娩は、自分らしい出産ができ大変良かったという感想が多く、満足度の高い出産体験となっている。また助産師にとっては、本来あるべき姿を見つめ直す機会となり、モチベーション・知識・技術の向上に繋がってきている。また平成26年5月から、6ヶ月未満の母親を対象とした、産後の母親の休養と体力回復に向けての癒しのケアの提供や、育児練習の場も設けている。

【おわりに】助産師として、分娩技術を向上させ、医師との連携を密にとり、妊産婦の持つ「産む力」を最大限に発揮できることを目指していきたい。

04-40

新生児ドライテクニック導入後の検証

熊本赤十字病院 看護部

○小田原 由香里、志賀 陽子、米村 真由美、白石 愛

【はじめに】長年A病院では、新生児の清潔法は生後1日目より沐浴法を行ってきた。近年、沐浴よりドライテクニックが推奨されていることから、A病院でも平成26年1月より新生児の清潔法を沐浴からドライテクニック(以下DT)に変更した。しかし、導入後残存した羊水や血液による皮膚への影響などを心配する意見がスタッフから挙がった。先行研究においてDTの有用性が立証されているが、従来行っていた沐浴法と比べて問題がないことを明らかにすることを目的として、研究に取り組んだ。

【研究方法】平成26年1月1日～4月10日にA病院で出生した正期産・経膈分娩の出生体重2500g以上の正常新生児40名をDT群とし、平成25年の同時期に出生し沐浴法を実施した正期産・経膈分娩の出生体重2500g以上の正常新生児40名を沐浴群とした。各群の診療録や看護記録を後ろ向きに情報収集し、皮膚トラブル、臍トラブルの有無と、体重減少などの全身状態について比較調査した。

【結果・考察】最大体重減少率はDT群7.0%、沐浴群7.15%、生理的体重減少から増加へ転じた生後日数は、DT群3.55日、沐浴群3.6日、生後1日目以降に嘔吐した人数はDT群10名、沐浴群11名、臍トラブルが生じたのは、DT群4名(10%)、沐浴群6名(15%)、生後2日目の皮膚亀裂は、DT群14名、沐浴群18名であった。各項目において有意差はなかったが、体重減少率、臍トラブル、嘔吐においてDT群に少なかった。結果、DTは沐浴法と比べて新生児の清潔法として問題ないことがわかった。

04-39

産科病棟での新たな取り組み

～出産後のウィメンズヘルスの向上～

岡山赤十字病院 リハビリテーション科¹⁾、看護部²⁾

○安藤 研介¹⁾、川上 めぐみ²⁾、高原 早苗²⁾、齊藤 千寿子²⁾、
高橋 雅也¹⁾

【はじめに】妊娠中の腰痛は約40～80%の妊婦に生じると報告されている。当院の産科でも腰痛や肩こり等(運動器のトラブル)の訴えが妊婦より多く寄せられている。しかし、産科Nsでは運動器トラブルへの対応が困難であるため、PTへの依頼があった。そこで、現在2ヶ月に一度実施しているパパママスクールという赤ちゃん同窓会を活用し、2013年から妊婦へ実施している運動器トラブルへの取り組みを紹介する。

【目的】腰痛や肩こりに悩まされる産後の女性に対して、身体的・精神的なストレスの軽減すること。

【方法】対象は、赤ちゃん同窓会に出席したお母さんとした。腰痛・肩こり改善方法を指導し、自宅で手軽にできるHome Exercise(HE)プログラムを作成した。改善方法としては2個のテニスボール使用し、足底から開始し頸部や肩周囲まで筋膜リリース(Superficial Back Line)を実施した。さらに、姿勢(臥位、座位、立位)指導も実施した。

【結果】腰痛・肩こり等の症状があるお母さんから筋膜リリースで「楽になった」と答えた。全ての参加者が手軽なHEであったと答えた。正しい姿勢の話ではためになったと全員が答えた。「今後このような会があれば是非参加したい」と全ての方が答えた。

【考察】妊婦は産後にかけて、姿勢や筋肉および靭帯の著しい変化が生じ、運動器トラブルが発生しやすい状態である。更に出産後では「乳児が居るから治療院に通うのも一苦労」「治療直後は良いが(治療効果が)継続しない」という声もある。従って、自宅で手軽にできるHEの指導が重要であることがわかった。今後はPTがHEの正しい指導方法を産科Nsへ指導し、妊娠中から産後にかけてケアする担当Nsが姿勢の指導や出産後のHEの指導も行なえるようにしていく必要がある。

04-41

はじめてのころみ出張栄養指導 第2報

伊勢赤十字病院 医療技術部栄養課¹⁾、糖尿病・代謝内科²⁾

○太田 真由美¹⁾、竹尾 圭子¹⁾、村田 和也²⁾

【はじめに】当院では4年前より病診連携を通じ地域の診療所の患者に栄養指導を行えるようにプランを練りH24年4月より実施する事が出来た。第49回の学会で第1報を報告したので、今回第2報を報告する。

【目的】地域の診療所で糖尿病の患者135人に栄養指導を行いHbA_{1c}が平均で7.6%から7.2%になった。しかし改善ができた患者も半年程経過すると元に戻る傾向がみられた為、HbA_{1c}が上昇し始めた時に再始動を行い悪化を防ぐ。

【方法】各診療所で栄養指導を受けた患者で改善したが再びHbA_{1c}が上昇してきた患者をピックアップしてもらい栄養指導を受けてもらう。

【結果】再指導後HbA_{1c}が下がった患者もいたが変化のみられない患者もいた。

【考察】再指導をしても変化のみられない患者をどの様にフォローするか、また継続栄養指導を行うには限界があるため、地域の診療所のスタッフに啓蒙をし診療所でもフォローをしてもらう様に考えた。